

第4回 北九州市発達障害者支援地域協議会
「第一部会（支援システム検討部会）」議事録

- 1 会議名 第4回 北九州市発達障害者支援地域協議会
「第一部会（支援システム検討部会）」
- 2 開催日時 令和3年12月23日（木）19:00～20:40
- 3 開催場所 WEB会議（Microsoft Teams を使用）
- 4 出席者
 - (1) 委員（敬称略）
中村貴志（部会長）、天本祐輔、徳永勝恵、小松未央、安武和幸、米光真由美、大坪巧弥、松延留美 計8名（2名欠席）
 - (2) 事務局
精神保健福祉課長 安藤卓雄
- 5 会議次第
事例検討（第二回）
【検討課題 就労支援（青年期）、大学での支援】
事例発表① 障害者しごとサポートセンター 所長 大坪巧弥 氏
事例発表② 西日本工業大学 保健室 教育カウンセラー 米光真由美 氏
- 6 会議経過（意見交換）
事務局説明、各事例発表後、意見交換を行った。

大坪委員より、就労支援（青年期）について事例発表

米光委員より、大学での支援について事例発表

【部会長】

先に、大坪委員と米光委員と私とで少し意見交換を行いたい。まず米光委員から大坪委員の事例について、質問等あればお願いしたい。

【米光委員】

実際の大学現場でこのような仕事をしているので、大坪委員のお話から、なるほどと思うことがたくさんあった。

委員の事例は、とてもよい形でずっと連携が繋がっているのが、今後こういうふうに繋がっていかればと思った。また、「活動を通じて自己を振り返る」とあったが、やはり己を知らないことには前に進めない、自己理解によって相手にも理解してもらえんということ、改めてそうだなと思った。

委員の障害者しごとサポートセンターと、うちの大学も連携できたらと思うが、どのように大学とサポート体制をとられているのかお聞きしたい。

【大坪委員】

数的にはまだそう多くない。というのが、うちの事業は雇用保険が財源なので、大学を卒業してからが対象になってくる。それが一点と、やはりまだ支援機関を利用するということがそれほど多くないのか、あるいはご本人がまだそこまで求めているのか。

ただ、2箇所ぐらいの学校の進路アドバイザーの方が、どういうところかということで話を聞きに来た。こういうセンターで、例えば在学中で直接支援はできないとしても、今後のことについては一緒にご相談にのれるという話をして、それをきっかけにご本人を連れて相談に来るケースも何件かある。

【米光委員】

ぜひうちもお願いしたい。そういう特性を持っている学生に関しては、それこそ在学中の早い段階から、将来の進路保障について、いろんな方向性や支援があること、こんなことができるということを発信していただくと、現場としては非常に助かる。卒業してから2、3年、決まらない学生がたくさんいる。だから、在学中からそういう支援を受けられたり、そういうお話を聞かせていただくと非常にありがたい。

【大坪委員】

例えば高校在学中の方が母親とか父親に連れられてとか、あるいは親や先生だけで相談に来るケースが最近少しずつ増えてきたという感じはしている。ぜひこちらもよろしくお願ひしたい。

【部会長】

実際の就労、会社などに繋いでいくときに、会社側の最近の雰囲気とか、就労に向けてご本人にどういうことが一番求められているのか伺いたい。

【大坪委員】

障害のある方、特に今は精神障害、発達障害の方たちをどう支えていくか、会社としてもどう受け入れていくかというのは、非常に大きなテーマになっている。

もちろんまだまだ理解が難しいところもあるが、以前に比べると、企業側もかなり勉強もしているし、前向きに取り組んでいるところが多い。

ただ、発達障害の方は一人ひとり非常に違う。基本的なこと、例えば知識というか、こういう特徴があるといっても、それぞれのレベルが違っていたりとか、行動が全く違ったりするので、正直なところ企業は戸惑う。相当勉強もしているものの、実際には戸惑う場面が多いので、ある程度継続的な支援が必要になってくると思う。

ご本人に必要なことは、決められた時間に行くとか基本的なこと。また、自己理解が必要というのは、なにかできなければならないというわけではなく、自分が苦手だということを知っていること。そうするとアドバイスが入りやすい。だから、そういう自己理解がある方は、

「間違っていたり、明らかに自分がおかしいことは言ってください」という表現をされる。そうすると、企業はそこをはっきりと伝えて、何とか修正なり、次に進んでいける。そういう意味で、自分の苦手さを知っている、というところは必要かなと思う。

【部会長】

大学で学生に関わっている中で、頑張らなくてもよいところを頑張りすぎてしまうという矛盾を非常に強く感じる。支援を受けること、支援を受けながらもよい、ということ自分を受け入れられるか、そのあたりが非常に重要だと、委員の話を聞きながら思った。

大坪委員から米光委員にご質問いかがか。

【大坪委員】

米光委員の話を聞いて、近くの仲間の支えというのは、本当に大事だなと思った。会社で働いている方も、辞めようと思っていた時に、同僚からの声かけ、優しい言葉、冗談を言ってもらったりとか、それで救われる方も本当に多い。

米光委員が学生ご本人の特徴を話して、周りの方とうまくいったことも非常に素晴らしいと思ったが、何か工夫をされたところがあるか。

【米光委員】

工夫ということはないが、ストレスマネジメント教育というのをした時に、そういうタイプの子がいること、もしかしたら自分もそういうタイプになるかもしれない、また、発達障害に対するラベリングとか、差別的な意識をなくしてもらおうと、世の中にはいろんなタイプの人がいるという話をした。そして、人間関係とか鬱の問題、今大学生で年間5～600人の方が自殺していると言われているが、部会長がおっしゃったように弱音を吐くこと、助けてと言えることは決してかっこ悪くない。いろんな人に助けてもらいながら、相談しながら前に進むということは、むしろすてきだと思うということを、ずっと言い続けている。その中で、たまたま学生が自分のことを話そうと思う、という話になったのかなと思う。

もう一つは、教師とか大人たちがいろんな関わりを持つよりも、同年代の友達の影響、声かけが何よりも効果があるということが分かった事例であり、仲間というのは本当に素晴らしいと、彼らを通して思った。

【部会長】

米光委員がお一人で保健室を切り盛りされているということについて、もちろん大学には、教員や事務職員、技術的な職員もいるかと思うが、そのあたりの学内のネットワークをどう作っているのか伺いたい。

【米光委員】

人件費の問題とかシビアな話でなかなか難しいところがあり、そこが国公立とは違うところ。私一人の力ではなかなか難しいので、この10数年間は少しずつ先生方を巻き込んでいった。そのような発達課題に、非常に理解を示してくださる先生が、たまたま今の大学の学生指導部長をしていて、とても大切な問題ということで応援をしてくれている。保健室や相談室の位置付けが、なかなか認めてもらえなかったりする。

私立大学は、特別支援に対して合理的な配慮も努力義務だが、国公立は義務。今後、私立も義務になっていくのではないかと思うが、私立だろうが国公立だろうが、子供たち、学生たちは一緒。ぜひその支援のあり方を、国自身、文科省が強い思いを持って言ってほしい。末端で働く私たち現場としては限界があるので、ぜひよろしくお願ひしたい。

【部会長】

その点について、少し情報提供させていただきたい。

今、九州の国立大学の障害がある学生の支援に関するネットワークがある。その中で年に1回は少なくとも情報交換会、もう1回は支援者、学生も含めて研修会などもやっている。

今私どもの情報交換会の中で一番のトピックは、国立大のネットワークをいかに私立、公立大学、専門学校に広げるかということ。来年度、少しずつ県単位、市単位、あるいはより小さな単位で、繋がりをいろんな大学と作っていきこうということを始めるところ。実際、西南女学院大学や、私どもの大学等3~4つぐらいで、小さな意見交換会を最近行った。こういう小さな繋がりも、ちょっとした相談事があるときには、とてもよいと思う。また、そこに就労支援を行っているところにも参加していただいた。今日大坪委員からの話にもあったように、障害のことを長いスパンで考えると、就労というのはやはり大きい問題だろうと思っている。

そういう小、中、大のネットワークの場を、できるだけ重層的に作っていければという動きをしている。

それから、米光委員の話に出てきた全国学生支援機構について、この中に障害学生支援委員会というのがある。そこに私も関わっているが、その中でも話題は、私大等で差別解消法が努力義務から義務になることを念頭に置いてどうしていくかということ。

もう一つは、九州ブロックではうちの大学が、従前から拠点校相談というのをやっている。何か困りごとがあれば、障害学生支援委員会を介して相談を上げて繋がるというシステムもある。ただ、この辺は案外周知されていないところもあり、情報を十分に知ってもらうことが非常に重要だと思っている。

少し長くなったが、そういう全国的、あるいは九州ブロックの動きもあることも少し紹介させていただいた。

他にご意見いかがか。

【委員】

米光委員の話で、大学入学が決まった後、すぐに母親から連絡があったということで、非常に動きがはやく、それがこういう結果に繋がったのだと思う。

A君のそもそもの情報は母親のメモということだが、小中学校などでは一貫した支援ということで、個別の教育支援計画を作成してツールで繋げていく。早いところは幼稚園、保育園の段階から作成して、小学校、中学校へと繋げていく。

A君の場合、入学時にそれまでの一貫して繋げていたツールというのがどうだったのか伺いたい。

また、入学時の問診票みたいものを作成されていて、それも非常によいツールだと思ったが、大学入学後、先生たちからの引き継ぎや情報共有を行う中で、大学の中で使っていたツールなどがあれば、伺いたい。

【米光委員】

聴覚とか視覚障害者の受験時の支援については事前によく聞かれる。ただ、大学入学前に障害の話をするとう合格させてもらえないかもしれないということで、合格が確定してから、実はうちの子は、うちの生徒は、という話がよくある。その際、学校から連携シートのようなフォーマットで作ってくる方もいる。

相性などもあると思うが、A君の母親は、なかなか息子のことを学校の先生に理解してもらえなかったと言っていた。メモ紙を持ってきた際は、何とか最後の砦である大学では楽しい学校生活を送ってもらいたい、遠くからなので一人暮らしになり、本当にやっていけるだろうか、という母親の思いがいっぱい書かれていた。

だから、連携シートというわけではないが、例えば疾病があった場合、違う病院にセカンドオピニオンに行くときにカルテを持っていくように、そういう良い形で連携が取れたらよいと

思う。特に、幼稚園や保育園の先生は本当に当事者の原点を知っているし、小、中、高、大学、会社まで連携して繋げていくことができれば素晴らしいと思う。

2番目の質問について、大学では私独自で「元気になるシート」というのを作っていて、そのシートやメモを使うことなどをワークフローの中に入れていく。それを教科や学科の先生などに理解してもらうために、事前にパソコンなどで情報の共有ができるようにしている。

【委員】

私の友人も、関東の大学で先生のように学生の支援をしている。その友人と話するときも、先生の話のように、初めての一人暮らしでご飯を作る、掃除をする、そういう日常的なところの段取りから支援をしないと、そもそも生活が成り立たない、そこからスタートだと聞いたことを思い出した。委員のツールのこととか、その友人とも情報共有してみたいと思う。

【部会長】

高校段階の支援の問題は、実は今回の協議会の中でも少し落ちているところ。ここについてどうあるべきか、そして入試、大学、このあたりもいつかは少し議論がいろいろあるところだと思う。

それと情報提供しておく、1月の共通テストの時に配慮申請があるのは、全障害合わせて2500～3000ケース。その中でも発達障害等の部分がやはり増えてきているのは確か。

そこで配慮申請が出ると、国公立についてはそのまま前期、後期にもその申請の内容がいく。各大学はそれを基にして、入試の段階からどう配慮するか、さらに合格するとその後も継続的にその処置が取られるという状況。

その他ご意見いかがか。

【委員】

大坪委員に質問だが、関係機関と連携した支援の流れという図の中で、仕事に関しては、就労移行支援業者や障害者職業センターなど、いろんなツールを使って理解を深めていったと思うが、本人の生活面、医療面ではどういう繋がりがあって、就職のバックアップに繋がったか伺いたい。

【大坪委員】

ご紹介した事例の生活の部分について、例えばAさんの場合は、同居の祖母に障害に対する理解が非常にないという状況があり、会うことも試みたが見事に拒否されて、なかなか同居家族の理解は得づらいところはあった。

働く上で生活面に課題のある方はかなりいる。そういう場合は、基幹相談支援センターや、その発展上で相談支援事業所と一緒に連携したりとかはある。最近の事例で、家から出たいという方がいて、その方のグループホームと一緒に探したりとか、手続き関係を一緒に動いたりとか、そういったことはやる。

金銭面の問題がある方は、例えばグループホームで管理をしてもらえるのであれば、そういう形をとるし、数は少ないが権利擁護を使う場合も中にはある。

どうしても生活上の課題が出てきた方については、他の機関が動けば動くし、そこが難しい場合は私たちが一緒に動かさせていただくこともある。

医療面について、精神障害の方は医療との連携が結構あって、発達障害の方も割と自分で医者とのコミュニケーションというか、しっかりと関係性をもたれていたり、必要なことは言われているので、私から医療面に連絡を取るケースは割と少ない。

ただ、どうしても必要があれば連絡はするし、こちらの情報を伝えたりはする。

【部会長】

医療面という話が出たが、大学、就労、生活面など、医療サイドからのサポートについて、ご意見いかがか。

【委員】

発達障害やいろいろな原因でこぼれ落ちていく方の中で、今回のケースレポートの子たちは、そういう意味では幸運にも網に引っかかったのだと思う。実際はたくさんのこぼれ落ちる方がいる中で、アメリカンネイティブのドリームキャッチャーのような、その網の目をどうにか細かくしてこぼれ落ちる人を救っていかないといけない。もちろんシステムを多く作るというのも大事かもしれないが、新しいシステムというよりは、会議の中で周知するとか、今現在やっている人たちの横の繋がり、情報交換で網の目を細かくしていき、そこに引っかかる人たちを多くしていくということが大事。

今活動している人たちの横の繋がりとか、そういうところを密にする。大きな繋がりもそうだが、この会議のように地域の中で、例えば現場で活躍してサポートしている米光委員など、そのような個人的な繋がりも、網の目をさらに細かくしていくために大事なこと。イメージ的なことしか言えないが、網の目を小さくしていく努力、社会的にもそういうサポートに力を入れていく必要があると感じた。

【部会長】

他にご意見いかがか。

【委員】

A君が皆にそういうふうに発表した後、学生たちからの相談とか、自分もみんなに知ってもらいたいとか、そういうリアクションはあったか。

【米光委員】

実はあった。大学の保健室や相談室は行きがたいイメージがあるが、私の場合はウェルカムで、おいしいお茶を出すよと言うと、学生が来ていろんな話をしてくれる。この話をした時、A君に悪いことをしたと言った子が来てくれて、小学校の時にそういう友達がいって、いつも標的にして意地悪をしていた、本当に悪いことした、と自分を振り返ってくれた。教育というか、みんなにこういう話をするということは、本当にワクチンだなと思った。いろんな形でワクチンを打つことによって、いろんな予防になるということを感じた。

だからその後、相談ももちろん増えたし、他の学科の学生も相談に来たりとか、話をする機会も年々増えている。

【委員】

こういう話を聞いてつくづく思うのが、心の傷は、なるべく小さいときから受けないようにする支援をしないと、連携がどうかと言っても、大きくなると重ねた経験がすごすぎて手遅れになる。お二人の委員の事例もそうだが、そのときに適切に理解されて支援されること、仲間が助けてくれることは、かなり心強いと思う。メンタルヘルス教育は、高校でも中学校でも大事であるし、中学校では保健室はみんなの居場所というか、不登校の子がとりあえず保健室までというのもあるので、そういう連携があって欲しい。そのような米光委員の知識、関わり方などを、他の高校とか中学校とかの保健室の先生たちにも知ってもらうことも大事なかなと思う。

先ほどから、情報の共有が大事と言われていたが、今はネットもあり、直接会合や講演会ではなくても、ここを見たらこういうことが分かるとか、チャットやメールでも相談できるので、支援者の方もそういう連携がどんどん取れたらよいと思う。

今日の話で、知的レベルがいろいろあっても、自閉症の特性も結局は同じであるということをつくづく思った。対人関係の苦手さをどうフォローしていくか、その自己理解も本当に大事だと思うので、そういうのが広がって欲しいと思う。

【部会長】

今日はいろんな意見を聞かせていただいた。次回、今日のまとめの振り返りをして、次に進めていこうと思う。

【事務局】

常にチャットはできるので、もっと聞きたいということがあればどんどん書き込みをして、遠慮なく情報提供含めてご活用いただきたい。

本日は、これで終了させていただく。